

# 言葉の教育と言葉の指し示すものの教育

堀井 謙一

言葉と言葉の指し示すものの区別は、よほど用心しないと危ない。

だから「言葉の教育」がいつの間にか「言葉の指し示すもの」の教育に化けてしまうことがある。たとえば、国語学の期末試験で「トリー（通り）」と「ドーロ（道路）」の違いを述べよ」とやったら、人間の生活と結び付いたのが通りで、単なる場所としてとらえたのが道路、「道路工事」とはいうが「通り工事」とはいわない、「表通りのお店」はいいが「道路のお店」はなじまない、といった解答に出会うことがある。もう絶望してあきらめられない。

このあたりまでは、笑い話になるが、笑ってばかりもいられない。

接続詞（語）の教育は、言語事項の指導だが教科書にこんなのが出てくる。

わたしは、必死で走った。だから、二等賞になった。

わたしは、必死で走った。しかし、二等賞になった。

「だから」も「しかし」も使用でき、「だから」の場合は、努力に成果に満足していることがあらわれている。

「しかし」の場合は、がっかりしていることがあらわれている。

ここまでは私も大賛成で、児童は接続詞とは面白いな

と思うだろう。立派な言語教育である。

だが、次のような例にであうと首をかしげてしまう。

試験管を落としてしまった。でも、われてしまった。「でも」というところが変だから直せ、というのである。もちろんおおかたの児童は直すことができるし、直しもする。

思い起こせば、大学入試まで、ひょっとしたら教員採用試験まで「括弧A Bに適切な接続詞を次のうちから選んで入れよ」という国語の試験問題をどんなにこなしてきたことか。

さて、「試験管を落としてしまった。でも、われてしまった。」の「でも」の使用が変だという教科書の主張に同意する読者は、やはり言葉と言葉の指し示すものの区別に不用心な読者であるといわせていただきたい。こういう問題を出して、言葉についての能力をみていると錯覚している試験官がいたら、受験生ではなくその試験官を落としたいくらいである。

この問題を扱っている論文がある。なかなか深く追求しているようで、やはり、言葉と言葉の指し示すものの区別に不用心な論文である。

井上尚美氏との共著である『授業に役に立つ文章論・文体論』に収められた大熊徹氏の、称して「概念砕き

必要である」である。

雨がふってきた。( )、遠足に行った。

の( )に接続詞を入れさせると、ほとんどの児童が「だが」「しかし」を入れるという。

だが、あえて大熊氏は「だから」を入れる。児童は口々に「おかしい」という。そこで大熊氏は、「雨がふってきた。」の前に、今年の遠足では理科の勉強をかねて川の水の増え方を見えてくることになっていた、という趣旨の文章を入れる。と、児童は、「なるほど」とつぶやくという。

児童の反応は正常である。だが、ここから「接続詞を勉強する前の接続詞の概念は、完全にくつがえされたように見受けられました。」と結論するとき、これは正常ではない。

「接続詞の概念は、完全にくつがえされた」とは、どういうことだろう。接続詞は文と文との関係を示すものではないと児童が思うようになったとでもいうのであるか。それとも「だが」「しかし」は逆接ではなく順接だと思ふようになったとでもいうのであろうか。もしそうなら事件である。

大熊氏の実践は「接続詞を用いた言葉の指し示すもの教育」として実に面白い。でも、これを言葉の教育、つまり「接続詞の教育」だというのなら、それには賛成しかねる。

まず、言葉は話者の意識を示すのであって(これに異を唱えることもできるが、このレベルでも議論できる)、言葉の指し示しているもの、そのものではなく、ダミー(つまり記号)である。時として、言葉と言葉の指し示しているものが食い違う事もある。

「雨が降ってきました。」というのは話者がそう思ったからであって、錯覚のこともある。錯覚したからといって、言葉の教育とはなんの関係もない。ときには嘘をつく不心得者がいる。といって、この人たちは、正直者とは違う言語や文法に従っているのではない。錯覚しないように注意深くしなさいとか嘘をついてはいけません、というのは言葉の教育ではなく、人生における心構えの教育である。「雪」のことを「雨」というのだと思ひ込んでいる児童を教育するのは半分、言語教育で、雪を雨と見間違えたり、雪なのに承知の上で「雨」という児童を教育するのは言語教育ではない。

さて、面倒な話はやめて接続詞。

接続詞とは、まあ文と文の関係を示す(文以外はいまは置いておこう)。だから、

最近、貧血気味だ。だから、ホウレン草を食べた。という文章において、「だから」は「貧血気味」と「ホウレン草を食べた」が順接関係にある事を示しているのであって、事実順接関係にあるかどうかは、栄養学の問題であって言語教育の問題ではない。栄養学からすれば

以前と異なって「貧血気味だ。しかし、ホウレン草を食べた。」となるらしい。栄養学の説は変わったが、接続詞に使い方には何の変化もない。

岩盤が堅かった。だから、トンネル工事は順調に進んだ。

これが最近の技術の進歩である。以前は、岩盤が堅かった。しかし、トンネル工事は順調に進んだ。

という技術レベルであつたらしい。

順接でも逆接でもいい場合がある、などといいだしてはいけない。またまた、言葉と言葉の指し示すものとの区別が曖昧になる。

試験管を落としてしまった。でも、われてしまった。これに「強化ガラスの」と付け加えて、

強化ガラスの試験管を落としてしまった。でも、われてしまった。

と「接続詞の概念砕き」をやったのが大熊氏である。

そうではないのだ。試験管は壊れやすい物だと思つてい

る者が、試験管を落としてしまった。それで、われてしまった。

たとえば、接続詞の使い方を心得ていることになる。

試験管は壊れにくい物だと思つている者が、試験管を落としてしまった。でも、われてしまった。

たとえば、これも接続詞の使い方を心得ていることになる。

試験管が事実壊れやすいかどうかは接続詞氏の知ったことではない。

だから、「文と文の意味のつながりは、決まっていることが多い」などといつてはいけない。

山田さんは愛犬家だ。( )、毎日欠かさず散歩をさせている。

愛犬家というのは犬を大事にするとはほとんど全部の人が思っている。だから、ほとんど全部の人が( )に順接の接続詞をいれる。だから順接しか入らないと思ひ始める。しかし、愛犬家とは犬をいじめる人だと思つている人は、逆接をいれる。その場合、その人は、愛犬家に対する認識において誤っているかもしれないが、接続詞の使用においては誤つてはいない。

もう同意していただけると思うが、大熊氏は接続詞の概念を完全にくつがえしたのではなく、「雨がふる」と「遠足に行く」ことの常識的な児童の考える因果関係の認識をくつがえしたのである。つまり、言葉の指し示すものの因果関係をくつがえしたのである。もちろんこれは接続詞を利用した有意義な教育ではあるが、言語教育とは無関係である。

量子力学の論文中の接続詞を抜いておいて、適切な接続詞を私がいれられなかったからといって、私は接続詞

の使い方を知らないのではない。量子力学を知らないのである。

理屈をいうな、などとはいわないでいただきたい。  
児童の作文、

隣町のおじいさんがひさしぶりにたずねてきました。だから、私は友だちの家に遊びに行きました。

こんなのに出会って、「だから」を「でも」にただちに赤鉛筆で直さないようにしたいものである。多くの場合、おじいさんの訪問は、家にいる、という結果をもたらす。といって、それは絶対ではない。言葉はそれを使用するものの意識の表現である。逆接しかないと信じている教師であっても、子供を呼んで聞いてほしい。

教師 普通は、おじいさんが来たときには友だちの家には遊びに行かないものだけど、どうしたのかな。

児童 うん、なにかお母さんに大事な話があったみたい。

教師 そうか、そうか。そういう時は、

隣町のおじいさんがひさしぶりにたずねてきました。母に大事な用があるようでした。だから、私は友だちの家に遊びに行きました。

と、ていねいに説明して書くんだよ。

児童 うん。

教師 「うん」ではなく「はい」。それに「母さん」ではなく「母」というんだよ。

児童が接続詞を間違って使用することは、まずない。多くは説明不足である。

言葉と言葉の指し示すものは一体化して受け取られるし、普通はそれでもよい。

接続詞を用いずに、また用いても「そして」だけで、次々に文をつづける児童がいる。そうした児童に文と文の間に「だから」「しかし」「また」などを意識して入れさせるのはよい教育だと思う。「だから」でしか結びつかないと思っている児童に「しかし」で結び付く場合もあることを自覚させるのもとてもいい教育だと思う。

だが、次の文章では、どちらが正しく接続詞を用いているか、などという試験問題を国語教師が作成したとしたら、言葉と言葉の指し示すものの区別に不用心ということになる。

地震が起こった。だから、断層ができた。

断層ができた。だから、地震が起こった。

もちろん、理科の教師が、どちらの文の指し示す自然現象が事実と一致するか、という試験問題を出せば適切な問題である。

一九九六・九・六

(本学教授)